

# 「孔雀明王像」東京藝術大学大学美術館蔵の現状模写 及び装潢

鄭 慧善 (東京藝術大学大学院)

## 研究目的

現状模写とは、顔料の剝落と褪色、加筆された部分などを含めた現在の状態を忠実に写す模写である。しかし、デジタル時代の現在、現状模写の研究は観点を改めて考える必要があると思う。デジタル技術を利用した印刷作品は人の手で描かれる模写作品より原画の現状をより正確に写すことができる。ここに 3D プリンティング 技術まで発展すれば、模写の意味はますます消えてしまうのが現実である。そのため、現状模写を中心にする研究は、何を研究するのか、どのような基準で現状模写をするのかなど、現状模写の観点を再解釈する必要があると考える。孔雀明王像の現状模写を通じて、原本の現状の雰囲気重点を置くのではなく、作家が作品で表現した意図、技法などを中心に作品を再解釈し、それを基にして、線描、白色顔料と接着剤（膠）色味関係 及び、彩色法を研究することが本研究の目的である。

## 研究内容

### (1) 原本の観察と考察

	仏説大孔雀明王画像壇場儀軌	安楽寿院所蔵孔雀明王像	原本（東京藝術大学大学美術館本）
明王	頭向東方の慈悲相 白色の肉身	大師様（一面四臂の慈悲相） 黄色味の肉身	大師様（一面四臂の慈悲相） 朱暈を入れた桃色味の肉身
衣服	白い衣に装身具	暖かな色味の具色	白群や、群青などの寒色
四臂	右邊第一手執開敷蓮華、 第二手持俱縁果、 左邊第一手當心掌持吉祥果、 第二手執三五莖孔雀尾	右第一手に開敷蓮華、 第二手に俱縁果、 左第一手に吉祥果、 第二手孔雀尾を持ち	右第一手に開敷蓮華、 第二手に俱縁果、 左第一手に吉祥果、 第二手孔雀尾を持ち
蓮華	白蓮華	青蓮華	青蓮華
孔雀	金色孔雀	羽を広げた形の正面向き、 羽の色順番は白 - 桃色 - 緑 - 青 孔雀尾は金色で、 本尊の背後に開けた様子	羽を広げた形の正面向き、 羽の色順番は白 - 桃色 - 緑 - 青 孔雀尾は金色で、 本尊の背後に開けた様子

今回模写する東京藝術大学大学美術館所蔵の孔雀明王像（以下藝大本）の図像は一面四臂の慈悲像で、四臂に蓮華と具縁果、吉祥果、孔雀尾を持ち、孔雀に乗っている姿である。孔雀は羽を広げた形で正面をしており、本尊の背後に孔雀の金色の尾が開いた様子が描かれる。藝大本は、安楽寿院蔵の平安時代の孔雀明王像（以下安楽寿院本）と構図が同じであるが、彩色を比べると、安楽寿院本は暖かな味がある具色を用い、肌色も黄色味であるのに対して、藝大本は白群や、群青などの寒色が用い、朱暈を入れた桃色味の肌色に表される。そして、安楽寿院本には截金線が本尊と孔雀に置いてあるが、藝大本は本尊を強調するため、本尊のみ截金線が置いてあり、孔雀は金泥で表現されている。藝大本の図像は「仏説大孔雀明王画像壇場儀軌」に基づいて描かれているが、彩色、線描の表現方法は作家の意図が反映されたことが分かる。

## (2) 模写を通しての考察

### ① 上げ写し、透き写しの作業で、線の流れを読む

本来、作家が絵を描く時の線は点描ではなく、線描で骨描きをするはずである。しかし、上げ写しの作業は残像現象を利用して写し取るので、一筆の線が点描で現れたり、断ち切って引いたりするのが多い。一筆の線には筆の弾力を用いた皴法と微妙な墨の濃淡があるので、作家によって固有な線の感じがあると思われる。ところが一筆の線を引いて描かず点描法で描くと、線の流れや動きなどがなくなり、作品の雰囲気も変わると思う。それゆえ、模写をする時、単純に線を引かず、どんな線の流れや動きなどがあるのか線の感じを読み取って、作家固有の線を理解する必要があると考える。そのためにもまず、図像の全体の構造や現状を理解する上げ写しの作業を行い、上げ写した下図に基づいて図像の剝落された部分まで復元し、線の動きをよみがえらせた。作品が持っている雰囲気は色味のみならず線描が持っている感じも重要だと思い、線まで復元した。

上げ写し	線描復元	絹に骨描き
		

	原本(東京藝術大学大学美術館本)	線描復元	透き写し	作品 (現状模写本)
宝冠				
天衣				
裳				

## ②絹と裏打紙の準備

絹はできる限り原本と織り目の近い物を選択し、矢車で染めた。そして、独特の艶と柔らかさを得るために8回の砧打ち作業を行った。この作業後、絹枠に絹を張り込み、滲み止めのドーサを引いた。



## ③白顔料と接着剤に関する色味研究

膠は昔から使用されてきた接着剤で、透明なものではなく、少し黄色味を帯びている。裏彩色の時に用いられる鉛白と膠の色味を研究したいと考え、兵庫県姫路市花田町高木地区で太鼓皮などを作る大崎哲生氏や郷土史家林久良氏の協力で、伝統的な無加の膠を作った。この膠は抽出段階によりだんだん黄色味が薄くなるので、膠の黄色味が白色に影響を及ぼすと思われた。しかし、膠と白色顔料を混合して塗ったサンプルを分析してみると、想像より白色の色差は微妙であった。また、膠の黄色味が薄いほど接着力が弱くなることが分かった。

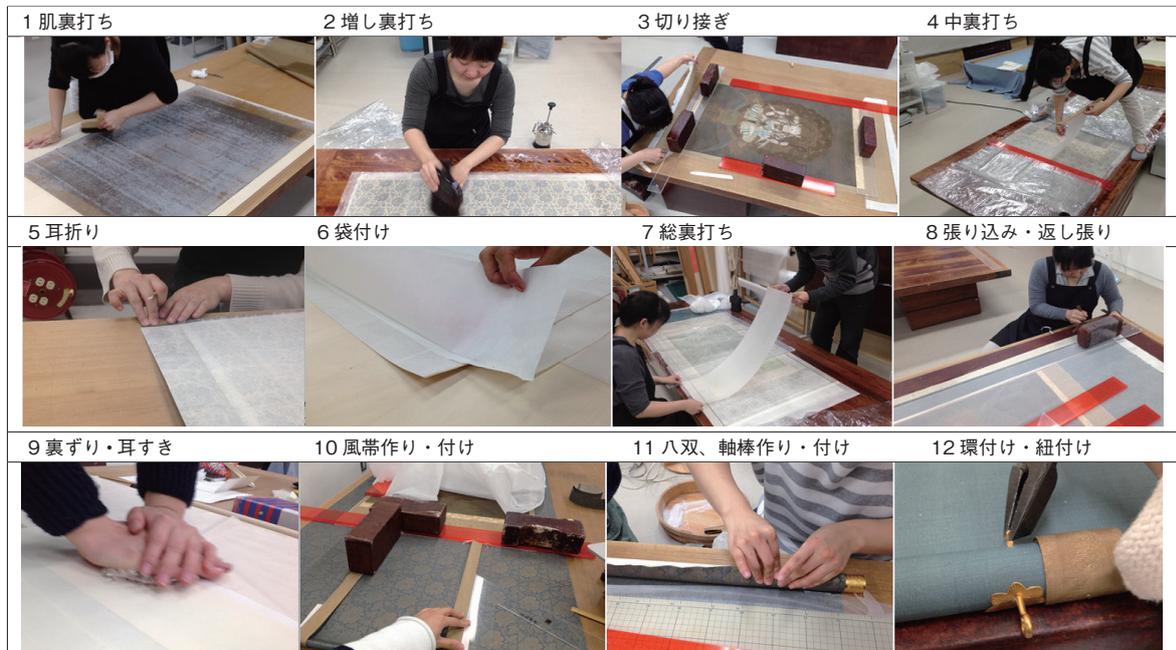
## ④彩色法の研究

孔雀明王像の修理記録を見ると、裏彩色が本尊だけに施されていた。そのため孔雀より明王のほうが重みがあるように感じられる。これは作家が意図的に彩色法を異にし、本尊を浮かび上らせたものだと思われる。特に、衣服と光背の彩色を見ると、作家はメインの本尊の顔を出せるため、「仏説大孔雀明王画像壇場儀軌」とは彩色法を異にして主題の本尊と副主題の孔雀を分けて表現したと考える。そのため、作品の観察と、修理写真を通じて作家の彩色法を再現した。

	彩色表現
光背	光背は二重円光であり、頭光と身光の配色順序を逆にした。 「頭光」(外側) 群青-丹-白-白緑(内側) 「身光」(外側) 白緑-白-丹-群青(内側)
本尊	本尊の顔に視線を集中させるため、補色効果を利用したと考える。 白緑を赤味の顔の周り(頭光の内側)塗り、本尊の顔を浮かび上らせた。
肉身	やや冷たさを感じる桃色味の肉身で表現した。裏側に鉛白を施し、表から朱暈を入れた。
衣服の色と模様	衣服の色は白群や、群青などの寒色で表現し、裁金、金泥線、白線で文様を施された。衣服の輪郭線を強調させるため裁金で現れた。金線は主文様、白線は金線文様の周りを補って表現した。 * 条帛表-裏彩色は白色(鉛白)、表彩色は白群地に群青の暈、文様は白色線の唐草紋 * 条帛裏-白色地に白色線の渦巻紋 * 腰布表-裏彩色は白色(鉛白)、表は薄丹地に丹暈、文様は金線の団花紋 * 腰布裏-薄白緑地に白色線の波紋 * 上裳-薄い白地に白色線の唐草紋、主文様は五つの花を十字配合した団花紋で、金泥で表現した。縁は条帛より彩度が低い水色に白線で梅の形の花を入り二重亀甲紋を施された。 * 下裳-表は白緑地に雷文、下裳の輪郭線に緑青の暈、裏は白色(鉛白)の渦巻紋
宝冠と装身具	装身具は裏箔を施し、表から黒線で、模様を描きたが、現在はほとんど剥落された。
蓮華	ほとんど剥落されて茶褐色に見えるが、本来は、緑青色の花びらに裁金の葉脈が施された。 蓮華の蕊は赤紫色地に白点を三段に並べ、丹の細線で引いた。
孔雀羽と孔雀尾	孔雀は羽を広げた形の正面向きで、羽の色の順序は白(羽根)-緑(初、次列風切り)-青(三列初列風切り) 孔雀尾は金色で、本尊の背後に開けた様子

## 装潢

原本の「孔雀明王像」は仏画棧槽（行）形式なので、同様の掛軸装とした。裂の色や文様は作品に合わせて、一文字、中廻し、総縁全部蓮華唐草、牡丹唐草文の金襴を選択した。小筋は二つの色を選び、作品の周りは本尊の肉身と似た桃色にし、中廻しの外側は総縁の青味の裂と合わせるため黄土色の小筋を選択した。本紙の肌裏紙は古色の雰囲気を表したいので、濃い矢車で染めた薄美濃紙を用いた。



## まとめ

本模写制作を通し、原本の彩色や線描の表現方法を読み取り、一筆一筆に作家の繊細な意図が反映されたことを理解した。線描の復元は原画の色味のみならず、線の流れや動きなどの感じまで表現できる一つの模写方法であると考えられる。デジタル技術が発展しても、パソコンが原画を再解釈して読みだすことは不可能だと思う。それで、我々が現状模写を行う時、原画の現状の雰囲気だけ写すのではなく、作家が作品で表現した意図、線描、技法などを中心に作品を再解釈し、それを基にして模写をする必要があると考える。今回の研究に基づいて模写家の役割と再認識することができると期待される。

### ■参考文献

編集部『美術大辞典—人名編』（1998年、韓国事典研究士）

小口偉一／堀一郎監修『宗教学大辞典』（1973年、東京大学出版会）

京都絵美「東京国立博物館所蔵国宝孔雀明王像の原図像の復元に関する研究」（2011年度、東京藝術大学大学院博士学位論文）

原瑛莉子「孔雀明王像の研究—東京藝術大学美術館所蔵本を中心に」（2009年度、東京藝術大学大学院修士学位論文）